

>>> 家庭経済

Under35が身につけておきたいお金の知識 <<< 第1回

Under35ならではの お金のもやもや

初めまして。ミレニアル世代のお金の専門家、横川楓です。

お給料をもらったり、買い物をしたり、税金や年金を支払ったり、日々の生活で接しない日はないような存在にもかかわらず、学校でも社会でもなかなか知る機会のないお金の知識。そんなお金のアレコレを、わかりやすく、等身大の視点から知ってもらうべく活動しています。

特に、Under35世代は景気が低迷している中の「失われた30年」に育ち、年金問題、少子高齢化、低賃金、続不景気など、自分たちのお金や日本のお金の仕組みに関して様々なもやもやを抱えています。まだまだ人生が長く続くからこそ、私たちが幸せに生きていくためには、しっかりと知識で武装していかなければなりません。

そんな風に、私たちは自分たちのお金、日本のお金の仕組みに関して常にもやもやした不安な気持ちを抱えています。Under

er35の私たちはこれから日本という国で生きていくにあたって、そんなもやもやとどう向き合っていけばいいのでしょうか。

私たちはお金のことを 知らなすぎる

物を買えば消費税を支払い、学生でも働き始めたからお給料から所得税が引かれ、20歳になれば国民年金を支払う。これらがどういう意味を持ち、どういう仕組みなのかというのを、日本の学校では詳しく教わる機会がほとんどなく、その後もなかなか知る機会がないまま私たちは大人になり、支払うことが当たり前という環境におかれます。

学校で習わないというだけではなく、友人同士でも親とでも話しづらいお金の話。そういった環境もあり、私たちはお金のことを知らなすぎるんです。その結果、この先の生活にいくらかかるかわからない、老後に年金がもらえるのかわからない、支



ミレニアル世代のお金の専門家
横川 楓

○ [よこかわ・かえで] 1990年生まれ。経営学修士(MBA)、AFPなどを取得し、現在は唯一の「ミレニアル世代のお金の専門家」として活動。「誰よりも等身大の目線でわかりやすく」をモットーにお金の知識を啓蒙、お金の仕組みを学ぶ機会がない日本の幼少期からの金融教育普及に尽力している。雑誌、WEB、新聞等の連載多数。著書『ミレニアル世代のお金のリアル』（フォレスト出版）。

払った税金がきちんと自分たちに還元されているかわからない、投資をしたら損をするかもしれない…など、**お金のことに関する漠然とした不安を、多くのUnder35が抱えています。**

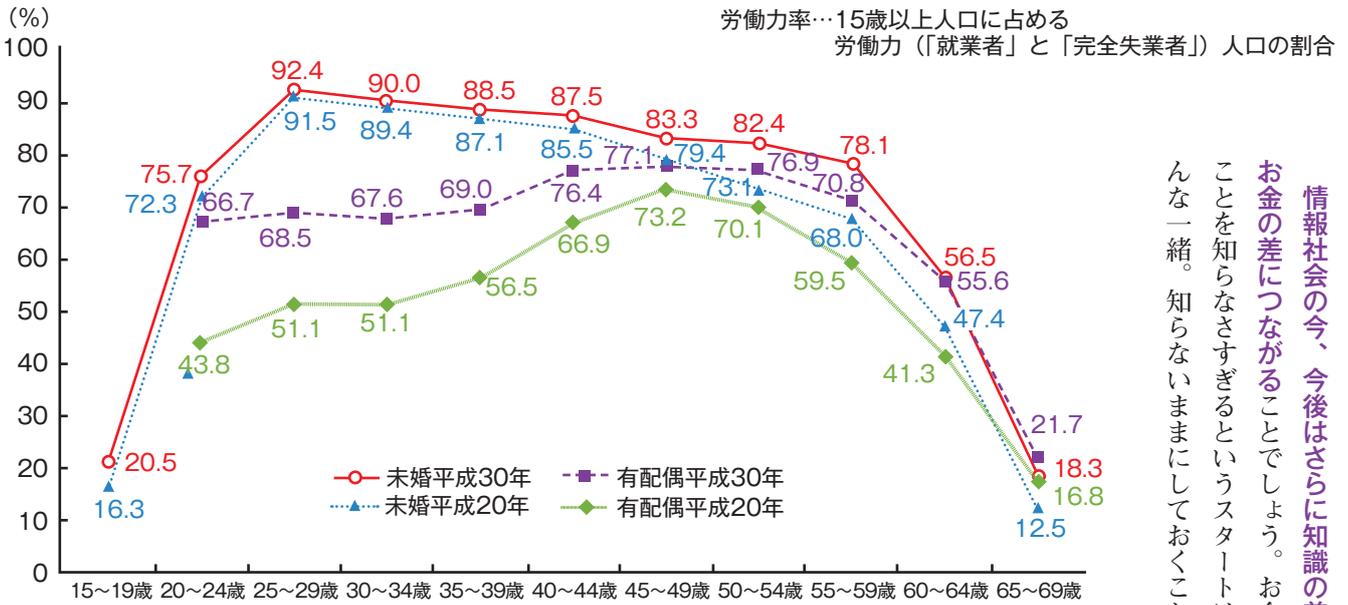
ですが、不安という感情は、「知らない」「わからない」ことが原因で生まれることがほとんどです。もちろん、知る機会が少なすぎる日本の社会にも問題はあると思いますが、教えてくれないのであれば自分から知ろうとしていくほかないということを、私たち自身が自覚しなければなりません。

お金の知識を持つことは、不安を取り除くだけでなく、損を防ぐことにもつながります。たとえば医療費控除やセルフメディケーション税制など確定申告をすれば税金が戻ってくる制度の利用や、税制上メリットのあるNISAやつみたてNISAを利用したり…。知らなければ、そういった仕組みを利用しようという選択肢を取ることが



>>> Under35が身につけておきたいお金の知識

【図表1】女性の年齢階級別労働力率



出典：総務省「労働力調査（平成20年、30年）」

できないのです。
情報社会の今、今後はさらに知識の差が
お金の差につながることでしょう。お金の
ことを知らなさすぎるというスタートはみ
んな一緒。知らないままにしておくことほ

ど、怖いことはありません。お金の制度や
仕組みに関する知識を蓄え、活用すること
が、不安を取り除く第一歩です。

**Over 35とUnder 35の
金銭感覚の差**

知識をつける上で、まず今の自分に合った知識を知ることがとても大事なことです。お金の本やインターネットの記事で貯金の仕方やライフプランについて読んでも、なんだかピンとこない…というUnder 35の皆さんも多いのではないのでしょうか。

たとえば、Under 35の中では結婚しても女性も仕事を辞めず、共働きをしてダブルインカムで家計を支えるスタイルがスタンダードですが、本やインターネットの記事では女性は専業主婦で夫が家計を支える設定でライフプランが掲載されていたりします。また、家や車を買うことが前提だったりもします。もちろん、地域によっては家を買うのが当たり前だし、車は必需品かもしれませんが、Under 35の中では金銭的な事情などでこれらの購入をためらう人が増えているのも現実です。

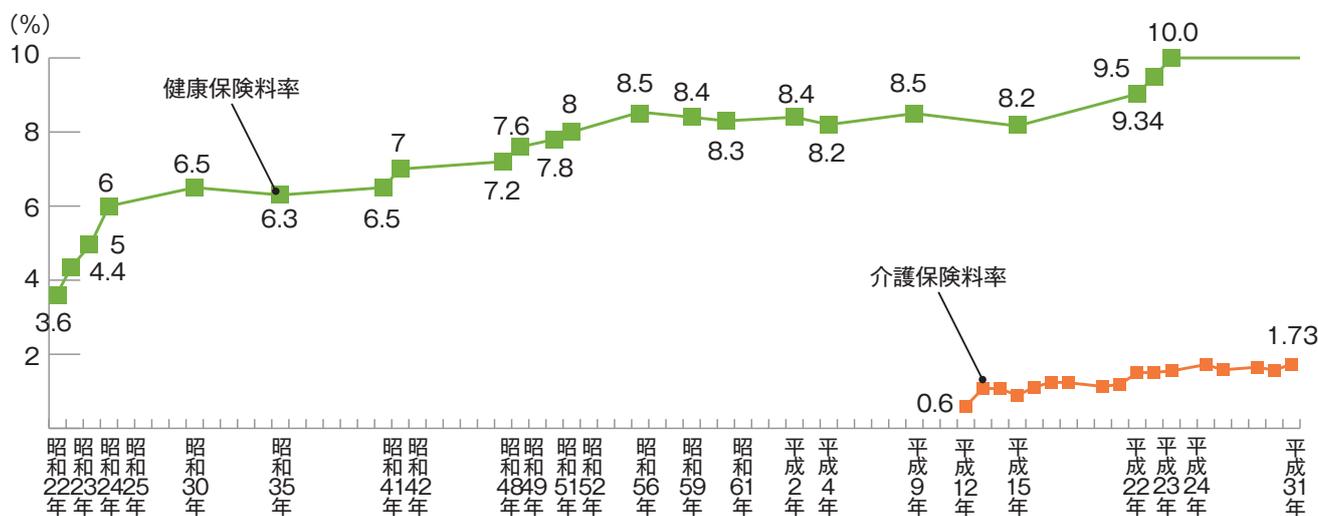
身近なところで私たちの親世代の価値観と比べてみても、私たちUnder 35とは全然違ってきますよね。このようにお金の価値観は世代によってかなり異なります。金銭感覚の差が大きくなってきている背景には日本経済の動きがあり、Under 35は体験していない高度経済成長期やバブル経済

期などの景気が良い時代を体験しているかどうかに関係しているかもしれません。

高度経済成長期には所得が前年に比べて毎年20%近く増えていたり、バブル経済期には海外旅行に行く人が短期間で約500万人から約1000万人に増え、高級外車を買う人も多く、お金の使うということに抵抗がなかった人がたくさんいたと聞きます。

しかし、そんな良い時代も長くは続かず、1991年にバブルが崩壊してからの、日本の経済成長は停滞してしまつたのです。2000年代を迎え景気が良くなった時期はあつたものの、高度経済成長期やバブル経済期のような好景気は、今後何十年も訪れない可能性もあります。景気が良かった時代のすべての人がお金に余裕があつたのではないにせよ、安定した雇用と年功序列による昇給、株価が高かつた時代の投資など日本全体としてお金に余裕があつた時代は、今より貯金もしやすく、ライフプランも立てやすかつたのは間違いありません。そして、景気が良かった時代は流れに身を任せていれば実現できたライフプラン通りの暮らしも、今の時代はそうはいかなくなつてきているのが悲しい現実。金銭的な理由で結婚や子供を産むことを躊躇する人が増えているだけでなく、男性が家計を支えて女性は専業主婦として家に入るという昔は当たり前だつた家族像が変化し、結婚後も働くUnder 35の女性はこの10年で約15%以上も増加しています【図表1】。

【図表2】政府管掌健康保険の健康保険料率・介護保険料率の推移



出典：全国健康保険協会HP「協会けんぽの健康保険料率等の推移」より作成

Under 35は、物心ついた時から不景気の中で育った世代です。また、Under 35より少し上の世代は、私たちよりも職に就くのが難しかった就職氷河期の時期を経験しています。物価も上がり、消費税はどんどん増え、ボーナスからも社会保険料が引かれるなど社会保険料の負担も増えているにもかかわらず、お給料も低く、残業してもお金が足りない【図表2】。もちろん、負担が増える分お給料が上がればいいのですが、そういうわけでもないのに手元に残るお金が減っていくという状況です。

しかし、今の時代に生きる私たちだからこそポジティブな面もたくさんあります。それは、昔よりもいろいろな仕組みや技術が進化しているということです。昔だったらお金にまつわる制度で疑問があったり、保険や投資商品を契約するための話を聞くにも、人づてで聞いたりわざわざ窓口に足を運ぶ必要がありました。今はスマートフォンで検索すればあふれんばかりの情報が一瞬で調べられますし、口座の開設だってスマートフォン一台あればすぐにできます。

そして、インターネットの普及により、お金の増やし方も多様化してきています。インターネット上で不要なものを売ったり、文章を書いたり、写真を売ってお金を稼いだり、自分が持て余している物や自分の得意なことを、わざわざどこかに行かずともインターネット上のやり取りでお金に換える方法も生まれました。

最近では、特にキャッシュレスサービスの競争も激しく、各社様々なお得なキャンペーンを打ち出しています。Fintechという言葉もあるとおり、お金を貯める・増やす・管理するなどお金に関する便利なサービスもどんどん生まれ、新しいものを利用すれば、お得に、楽に、賢くお金と向き合える時代になってきています。

年金は払わないほうが得？

さて、Under 35のお金のもやもやと言えば、収入も少ない中で、将来のため、老後のためにお金を貯めていかななくてはという漠然とした不安。その中でも、特に気になるのは、年金のことではないでしょうか。年金だけで暮らしていけるくらいの額を将来受給できればいいのですが、そういうわけにもいかないのです。仕事を引退した後のためにお金を貯めたり投資をしたりと、今から増やしていかなければならないのです。

そもそも年金には、簡単に言うと2つの意味合いがあります。皆さんが思い浮かべるのがきつと「老後にもらえる収入」としての年金。こちらは今支払っている年金保険料が直接将来の自分の年金に充てられるのではなく、今働き盛りの世代が今の高齢者のための年金を支払うという、世代間で代々負担していくという仕組み。今年金保険料を支払うことで、老後に年金がもらえるという約束がされるような形です。



>>> Under35が身につけておきたいお金の知識

【図表3】厚生年金保険（第1号）
受給者の平均年金月額推移

単位（円）

	老齢年金	障害年金	遺族年金
平成30年	145,865	102,855	83,704
平成29年	147,051	102,890	84,180
平成28年	147,927	102,398	84,694
平成27年	147,872	102,630	85,200
平成26年	147,513	101,906	84,831
平成25年	148,409	103,175	85,913
平成24年	148,422	99,542	84,712
平成23年	149,334	100,139	85,328
平成22年	150,034	100,716	85,919
平成21年	153,414	101,061	86,009
平成20年	155,345	101,323	86,172
平成19年	161,059	105,595	89,129
平成18年	165,211	105,475	89,276
平成17年	167,172	106,150	89,845
平成16年	167,529	106,024	89,998
平成15年	171,365	106,188	90,334

【図表4】国民年金受給者の
平均年金月額推移

単位（円）

	老齢年金	障害年金	遺族年金
平成30年	55,809	72,109	83,208
平成29年	55,615	72,245	82,932
平成28年	55,464	72,453	82,404
平成27年	55,244	72,565	81,832
平成26年	54,497	71,995	80,404
平成25年	54,622	72,607	80,194
平成24年	54,783	73,166	61,736
平成23年	54,612	73,503	61,626
平成22年	54,529	73,642	61,786
平成21年	54,258	73,768	61,810
平成20年	53,936	73,882	61,720
平成19年	53,602	74,282	81,844
平成18年	53,249	74,400	82,232
平成17年	53,012	74,789	82,299
平成16年	52,565	74,964	81,935
平成15年	52,314	75,385	82,297

出典：厚生労働省「厚生年金保険・国民年金事業の概況」より作成

一方で、年金には今現在の自分たちに関係する側面もあります。けがや病気で生活や仕事に支障が出てしまう場合などにももらえる「障害年金」と、自分が万が一死亡してしまった場合に遺族が受け取れる「遺族年金」です。つまり、年金は将来のためだけでなく、今のためのものでもあります。

しかし、最近の年金に関する話題と云えば、不穏なものばかり。Under 35の私たちが老後を迎える頃には年金がもらえなくなるだとか、受給開始年齢が70歳に延びるだとか、毎月のお給料から引かれる金額も大きいし、払わないほうが得？なんて考えている人もいるかもしれません。しかし、20歳になった

ら年金保険料を納めるのは義務。払わないという選択肢は選べないのです。不安を抱えつつ、支払いは続けなくては行けない…。

自分の年金と老後のお金について考える上で、まず知っておいてほしいことがあります。一つが、現在、年金をもらっている人はいくらもらっているのかということ。会社員が加入する厚生年金（国民年金を含む）は平均約14万6千円で、それ以外の自営業者などが加入する国民年金は平均約5万6千円となっています【図表3】【図表4】。「少ない！」と驚きませんか？会社勤めかそうではないかによって、2倍以上も金額が変わります。

また、国民年金では年金額にあまり男女差がないですが、厚生年金では男女で賃金に差があった時代の報酬及び加入年数が反映されるため男性は約16万円、女性は約10万円と、男女間にも大きな差があります。あくまで平均の数字なので、この金額より多くもらっている人もたくさんいますし、退職金をもらえたり、老後のための貯金がきちんとあれば、わずかな年金だけで暮らすにすむはずはです。

とは言え、今の年金の制度は順調に人口が増え、経済を支える働き盛りの人たちの数が安定していることが前提で作られた制度。働く人がいる限り制度自体は破綻することはないので将来年金自体がもらえないということにはならないとしても、少子高齢化が進む中で何か抜本的な改革がされな

い限り、このままでは私たちがもらう年金は、今の受給金額よりもっと減ってしまうなんてことは大いにあり得るのです。そういった現実、しっかりと受け止めなければなりません。

年金が不安だ…とは思っていても、将来自分がいくら年金をもらえるのか知っている人は少ないのではないのでしょうか。実はそれを具体的に確認できるシステムがあるのです。それが**日本年金機構の「ねんきんネット」**です。こちらに登録をすれば、パソコンやスマートフォンから**自分の年金の情報を確認することができます。**

このねんきんネットでぜひ利用してほしいのが、**年金見込額の試算**。あくまで試算なので、将来確実にこの金額がもらえるわけではないですが、「今の自分の条件」かつ「現在の年金制度」では、だいたい毎月いくら年金をもらうことができるのか計算することができます（なお、年金見込額の試算は毎年誕生月に郵送されてくる「ねんきん定期便」にも記載されています）。金額が分かれば、具体的に今の収入や暮らしからしてどのくらい老後にお金を残していく必要があるのかが考えられるので、**Under 35はこの試算を必ずやってほしい**と思っています。

ここで試算して出てきた年金の額が多いか少ないかは納めている年金保険料の額によっても異なり、年金の額が極端に少ない場合は学生時代や転職の際などに年金保険料を納付していなかった時期があると考え

られます。

20歳を超えても、「国民年金保険料の学生納付特例」に申請することで学生の間は納付をしなくても済みますが、それはあくまで学生の間は支払いを待ってあげますよというもので、**納めていなかった分を後で追納しないと、20歳から支払っていた人よりも将来もらえる額が少なくなってしまう**なんていう落とし穴も。ねんきんネットでは自分が過去に支払った年金保険料の記録が確認できるので、納付していない期間の追納の手続きをするきっかけにもなることでしょう。

払わないという選択肢がとれない時点で、ずっと続く年金に対する不安な気持ち。年金制度を根本的に変えたり、受給金額をすぐに増やすことは難しいですが、一人一人ができることとして**大事なものは、日本の年金の仕組みや現状をきちんと把握し、自分の身の年金の現実と向き合うこと**です。年金制度の根本的な部分を理解できていれば、「妻自身も厚生年金を納めているから、平均で考えたら老後2人合わせた年金はいくらだな」と推測ができたたり、「自分はこれくらいしかもらえない予定だから、現在の生活から考えて毎月いくら足りなさそうだ」とか、よりリアルに考えることができるのです。

とは言え、働き盛りで年金保険料や税金などをしっかり払っているからこそ、払った分の恩恵が受けられないかもしれないことに對して不満は募ることでしょう。しかし、どれだけ不満を言っても、他人は助け

てくれず、自分のお金は自分で作っていく必要があります。また、不満を少しでも減らしていくためにも、お金の制度にしっかりと関心を持ち、選挙へ行つてきちんと自分が望む政策を充実させようとしている人に投票すること、理不尽だと思つたら少しでも声を上げていくことも大事です。

はじめにお話しした通り、私たちはお金の制度や仕組みをあまり理解しないまま大人になつてきました。思い通りの生活を送れていなくて、お金のことを考えるのが嫌になるときもあります。まだまだ続いていくUnder 35の長い人生の中で、**お金のもやもやを解決するには、今の自分の現状をしっかりと見つめ、経済状況と向き合い、自分で行動するほかありません。**今回は年金の話題をメインにお話ししてきましたが、私たちが知っておくべきお金の知識はたくさんあります。

Under 35は、苦しい中でもこれからの日本を生き、支えていく世代です。つらい現状もありますが、若い頃からインターネットのある環境で育ってきたデジタルネイティブで、これから次々と登場してくる新しく便利なものを取り入れられるという意味では伸びしろがたくさんあります。**従来通りのお金の常識やメソッドを鵜呑みにしたり、ただ流れに身を任せるのはやめて、日々知識をアップデートして、新しく誕生してくる制度やサービスなどを自ら進んで活用していくことが、私たちのすべきお金との向き合い方**と言えるでしょう。